

「のだ」に関する一試論

石黒 圭

要旨

本稿では、以下の4条件を満たすとき(ただし、③、④はいずれか一方しか満たさないこともあり得る)、話し手は「のだ」を選択すると考える。

- ① 話し手および聞き手の発話時の認識だけでなく、それに関連する既存の認識も問題にする。
- ② 話し手または聞き手の既存の認識の空隙を埋め(ようとす)る。
- ③ 話し手または聞き手の既存の認識を、発話時に不十分なものから充分なものにする。
- ④ 発話時の認識を話し手と聞き手に共有させる。

また、話し手と聞き手の既存の認識および発話時の認識に注目して9通りに分類し、その分類に従って、それぞれのグループの「のだ」の性格について論じた。

キーワード 既存の認識 発話時の認識 認識の空隙 不十分/充分 共有化

1 はじめに

「のだ」に関する研究はこれまでさかんにおこなわれてきた。その中で有力視されてきた説は大きく分けて二つある。一つは、「のだ」という形式を「説明」またはそれに類する観点で統一的にとらえる説であり、久野(1973)、寺村(1984)、奥田(1991)などが代表的である。一方、小金丸(1990)、野田(1997)はそれにたいし、「のだ」の機能を、スコープとムードに二分割して説明する立場をとる。「のだ」をスコープとムードに二分割する後者の説は、前者の説ほど一般的ではないが、やはり有力な説である。

しかし、ここへきて、「のだ」の研究が新しい展開を見せ始めている。その一つは、庵(1999)(2000)、庵他(2000)で示された「前提」という概念を使って「のだ」を説明する考え方である。もう一つは、菊地(2000)で示された、「共有されている知識・状況に関連する、未共有の知識(付加的な情報)を補う」形式として「のだ」を考える考え方である。この二つの考え方は、発表されたばかりのものであり、本稿ともふかく関わるので、その内容をおおざっぱではあるが紹介しておきたい。

庵(1999)(2000)、庵他(2000)で示された「前提」という概念は、小金丸(1990)、野田(1997)でいうスコープの「のだ」に別の角度から光を当てたものである。ここでは、庵他(2000)に基づいて紹介する。

庵他(2000:283-284)では、疑問文を、「その文が正しいかどうかを尋ねるために使われるもの」と、「その文が正しいことを知った上でその文の一部の成分を特定するために使われるもの」とに機能的に分け^(註1)、後者の、「話し手が正しいことを知っている部分」をその

文の「前提」とよび、「話し手が特定したい部分」をその文の「焦点」とよぶ。そして、後者にも「のだ」は使われるとし、「のだ」が必要な場合を次のような場合とする。

① 疑問文中に疑問語（疑問詞）が含まれている（疑問語疑問文の場合）

(1) 田中さんは何を見たのですか。（映画の話で）

② 疑問文中の成分が音声的に強調されている場合

(2) 田中さんは『タイタニック』を見たのですか。

③ 疑問文に必須成分以外の成分が含まれている場合

(3) 田中さんはこの時計をあの店で買ったのですか。

「前提」という考え方そのものは、庵他(2000)以前にも指摘はあったのだが、庵他(2000)の「前提」の概念は、スコープの「のだ」を、話し手および聞き手の認識の二重性という観点からあらたにとらえ直したもので、「のだ」によってスコープが生じる原因をよく説明しており、「のだ」の持つ基本的な性格の側面を的確にとらえていると思われる。しかし、庵他(2000)において、前提の「のだ」(=スコープの「のだ」)と関連づけの「のだ」(=ムードの「のだ」)がどうして同じ「のだ」という言語形式で表せるのか、前提と関連づけのそれぞれの用法に共通する「のだ」の性格は何か、というところまでは触れられていない(註2)。

一方、菊地(2000:29)はそうした二分割説を採らず、「のだ」を統一的な観点から以下のようにとらえている。

「のだ」の基本的な用法：

① 話手と聞手とが、ある知識・情報を共有していて、

② それに関連することで、話手・聞手のうち一方だけが知っている付加的な情報があるという場合に、その一方だけが知っている付加的な情報を他方に提示するときの言い方が「のだ(んです)」(その提示を求めるときの言い方が「のか(んですか)」)である。

(4) A 「どうして遅れたんですか」

B 「バスが来なかったんです」

この例の場合、Bが遅刻したという状況はA・Bに共有されており、この状況に関連して、なぜBが遅刻したのかというBしか知らない理由をAは知りたい。そこで、Bが遅刻した理由という付加的な情報の提示をAが「んですか」を使って求め、それに対してBがその付加的な情報を「んです」を使って提示する、と考えるのである。

菊地(2000)のすぐれた点は、「のだ」の基本的な用法を統一的に、しかも簡潔に規定したところにある。また、話し手、聞き手の知識・情報に、その用法の根拠を求めたところ

1 益岡(1991:65-66)の「存在判断型」と「叙述様式判断型」の区別を参照のこと。

2 論者自身は庵他(2000)の前提という概念に関連づけの「のだ」にまで拡張して統一的に説明したいと考えているが、庵氏御自身のコメントによれば、前提の「のだ」と関連づけの「のだ」の共通性を説明する必要がないとする立場もあり得るのではないかと、このことである。

も評価すべき点であると言える。菊地 (2000) によって、「のだ」の用法の整理にほぼ見通しが立ったといっても過言ではない。

しかし、この用法の規定が簡潔であるだけに、それに含まれない用法もあると考えざるを得ない。

(5) (朝起きて道路がぬれているのを見て) そうか、ゆうべ、雨が降ったんだ。
のような、丁寧体「のです」では通常表せないものは、庵他(2000:271)が指摘するように、状況に対する話し手の解釈を表すもので、ふつう聞き手の存在は問題にならない。

また、菊地 (2000:37) の中でも述べられているとおり、

(6) [唐突に] 僕ね、今晚デートなんです。えへへ。
のような例も上記の用法から外れる。

このような例を見るとき、「のだ」の用法を統一的に説明することの困難さをつよく感じる。とはいえ、庵他(2000)にしても、菊地 (2000) にしても、「のだ」の研究をおおきく前進させたことは疑いない。

こうした「のだ」の研究の流れの中で、今後の研究は、「のだ」の用法を統一的にかつ包括的に記述するという、相反することを求められているように思われる。本稿は、こうした最新の研究の流れを受けて、その困難な問題に取り組んでみようと思う。ただ、この最新の研究の流れに歩調を合わせるべく本稿の発表を急いだため、論自体がじゅうぶんに練れているとは言えず、その意味で試論の域を出ていないことをあらかじめお断りしておきたい。また本稿は、庵他(2000)、菊地 (2000) の内容は踏まえているものの、両研究とは独立して進めてきた研究であるため、用語等で両研究とかならずしも整合性を持っていないこともつけ加えておく。

2 本稿の「のだ」の考え方

2-1 「のだ」が使われる条件

本稿では、以下の4条件を満たすとき(ただし、後に述べるように、③、④はいずれか一方しか満たさないこともあり得る)、話し手は「のだ」を選択すると考える。

- ①話し手および聞き手の発話時の認識だけでなく、それに関連する既存の認識も問題にする。
- ②話し手または聞き手の既存の認識の空隙を埋め(ようとす)る^(注3)。
- ③話し手または聞き手の既存の認識を、発話時に不十分なものから充分なものにする。

3 「埋め(ようとす)る」と()をつけて表したのは、後述するように、疑問文の場合を想定しているからである。

④発話時の認識を話し手と聞き手に共有させる。

厳密さを多少犠牲にして、以上のことをわかりやすくまとめると、以下のようになる。

「のだ」は、話し手が、話し手および聞き手の中にすでに存在する認識を踏まえて、それに関連する新しい認識を示すことで、話し手または聞き手の中に存在する認識の空隙を埋め(ようとす)る表現であり、話し手または聞き手の不十分な認識を充分なものにしたり、新しい認識を話し手と聞き手とに共有させたりするはたらきがある。

2-2 認識の二重性

それぞれの条件について順に説明していく。①の条件「話し手および聞き手の発話時の認識だけでなく、それに関連する既有的の認識も問題にする」は、話し手および聞き手の中に、「のだ」を使って発話しようとする内容に関連のある認識がすでに存在していること、かりに存在していなくてもそうした認識が存在しないことが意識されていることを表している。つまり、「のだ」を使うと、話し手なり聞き手なりがすでに有している認識と、発話時点で問題にされる認識の二つによって構成される認識の二重性がつねに意識されるのである。たとえば、

(7)彼は大学院生ですか。

(8)彼は大学院生なんですか。

において、(7)のように本来「のだ」が必要とされない場合に「のだ」を使うと、聞き手の発話を疑うといった含意が生じやすく、失礼な表現になりやすい、と庵他(2000:286)で指摘されている。これは、話し手の側に「彼は大学院生とは思えない」という認識がすでに存在していて、それが「彼は大学院生である」という新たな認識と衝突しているからであろう。認識の二重性がはっきりと見てとれる。

また、野田(1997:120)は、話し手がその場で決定した意志を「のだ」が表せないことを指摘しているが、それはこの①の条件に違反するからである。

(9)*「じゃあ、それをいただくんです」

2-3 認識の空隙とその充填

②の条件「話し手または聞き手の発話時の認識の空隙を埋め(ようとす)る」は、菊地(2000:32)で述べられている「《知識・状況の共有を前提として、それに関連する未共有の部分の埋めようとする》ときに使う」に近い。ただし、本稿は、知識・状況の共有を前提としなくても「のだ」が使える場合があると考えているため、本稿のほうが覆う範囲が広いことになる(注4)。

②の条件は表にしてみると理解しやすい。

(10) A 「どうして会議に出席しなかったんですか」

B 「体調が悪かったんです」

において、まず、話し手Bは発話の前に、話し手Bおよび聞き手Aの認識を以下の表のように意識している^(注5)。「不十分な認識」「充分な認識」については次節で説明するが、ここではそれぞれ「Bが会議に出席しなかった」「Bは体調が悪かった」に相当すると考えておく。○はそうした認識があること、×はそうした認識がないこと、後に出てくる△は認識はあるが、訂正を要する誤ったものであることを表している。

(表1)

	話し手の認識	聞き手の認識
不十分な認識	○	○
充分な認識	○	×

聞き手Aの発話「どうして」によって聞き手Aの充分な認識に空隙があり、その認識の充填を望んでいることを知った話し手Bは、自らの充分な認識を、「体調が悪かったんです」という発話を通して聞き手に示すことで、聞き手Aの認識の空隙を埋めるようにする。その発話の結果、話し手および聞き手の認識の図式は表1から以下の表2ように変わるのである。

- 4 認識の空隙について考えるとき、どこまでを認識の空隙として認めるか、疑問文の扱い方が問題になる。まずYes-No疑問文についてであるが、Yes-No疑問文では答えがYesかNoのどちらかであり、質問する側もそのどちらかの答えを予想しているわけなので、Yes-No疑問文であるという理由で認識の空隙が生まれることはないと考えられる。「のだ」を使うと、(8)の「彼は大学院生なんですか」のように疑いの気持ちが強まったり、「お風邪なんですか」のように（鼻をかんでいる、咳が止まらないなどの聞き手の様子といった）前提があるために逆に確信が強まったりするという何らかのニュアンスが付加される（田野村1990:67-68参照）。一方、疑問語疑問文においては、認識の空隙が疑問語で明示されている以上、Yes-No疑問文とは異なり、どんな文にでも「のだ」をつけることはできるが、疑問語が存在し、形の上で疑問語疑問文であることが保証されているので、「のだ」をつけなくても文法的に問題がないことも多い。ただし、「なぜ」「どうして」で始まるものに代表されるような詰問調になりやすい疑問語疑問文は、2-4で述べる「のだ」の共有化の働きを利用して、あなただけが知っていることを私にも教えて、というニュアンスを出すために、「のだ」をつけて語調を和らげてやる必要がある。
- 5 ここで大切なのは、聞き手の認識が、話し手の意識の中にある聞き手の認識であるということである。したがってその認識は、実際の聞き手の認識と異なることもあり得る。たとえば、聞き手が知らないだろうと思って、話し手が「実は俺、大学を辞めたんだ」と言ったときでも、聞き手が「ああ、知ってる。弟さんから聞いたよ」と返答される可能性もあるわけである。

(表2)

	話し手の認識	聞き手の認識
不十分な認識	○	○
十分な認識	○	○

益岡(1991:145)は、「のだ」は主観的な帰結説明を表し、「わけだ」と違って客観的な推論に基づく帰結説明を表すには不適切であると述べ、以下のような例を挙げている。

(11) ?花子は毎日3時間ピアノの練習をする。したがって、1週間では、21時間も練習するのだ。

これは、毎日3時間ピアノの練習をすれば、1週間で21時間の練習になるのは自明のことであり、話し手の認識と聞き手の認識との間にギャップが存在せず、聞き手の発話時の認識の空隙を埋めたことにならないから「のだ」が使えないのである。話し手が自ら作り出し自ら埋める、話し手―聞き手間の認識のギャップが、「のだ」が主観的であるという印象を生み出していると考えられる。

2-4 不十分な認識から十分な認識へ

③の条件「話し手または聞き手の既存の認識を発話時に不十分なものから十分なものにする」に関して、これまでさまざまな提案がなされてきた。ここでは二つの認識の関係を「不十分な認識―十分な認識」という関係でとらえているが、この関係をとらえるとならえ方は「説明」(久野(1973)、田中(1979)、寺村(1984)、奥田(1991))「換言」(山口(1975))「背後の事情」(田野村(1990))「因果関係」(松岡(1987))「課題―解答」(益岡(1991))「情報の付加」(菊地(2000))などさまざまであった。これらのとらえ方は、本稿の考え方も含めて、どれも一長一短であると考えられるが、本稿の「不十分な認識―十分な認識」というとらえ方の一長をここでは論じたいと思う。

不十分な認識が十分な認識に変わるとは、

(10) A 「どうして会議に出席しなかったんですか」

B 「体調が悪かったんです」

において、聞き手Aには「話し手Bが会議に出席しなかった」という既存の認識はあるが、その理由は知らない。その意味で不十分な認識である。しかし話し手Bの「体調が悪かったんです」という発話によって、聞き手Aの発話時の認識が理由もわかる十分な認識となる、ということを示している。

(12) A 「この基石はどこで買ったんですか」

B 「北京のデパートで買ったんです」

(12)のように既存の認識の不充分なところが成分であれば、いわゆるスコープの「のだ」になるし、(10)のように「のだ」を伴う文の成分に不充分なところがなければ、いわゆるムードの「のだ」になる。

なぜスコープの「のだ」が文の一部にフォーカスを当てる機能を持つかを考えるとき、すでに述べたように、庵他(2000)の前提という概念を吟味するとよくわかるのであるが、なぜ「のだ」を使った文に前提が生じるかという、「のだ」に、聞き手もしくは話し手自身の認識の不充分なところを埋めて十分なものにする機能があるからであると本稿では考えたい。認識が不充分であるとは、認識は存在はするが、それが充分ではないということであって、それは庵他(2000)のいう前提そのものである。そして、認識が不充分だからこそ、充分な認識との間に認識のギャップ、つまり認識の空隙が生まれ、「のだ」というマーカーを付して、そのギャップを埋める必要が出てくるのである。

こうして考えると、この前提という概念は、ムードの「のだ」にも拡張できることになる。(10)のBの発話を「体調が悪かったから、会議に出席しなかったんです」とすればスコープの「のだ」になるわけであり、両者を一連のものとしてとらえることが可能になってくるのである。

「不十分な認識」「充分な認識」という用語にはそれなりの利点があると考えられる。その利点のひとつは、いわゆるムードの「のだ」の用法がたとえば「説明」「背後の事情」といった用語でとらえられると、「のだ」のついた文のほうが補足的であると誤解されるおそれがある。しかし、事実は逆であって、「のだ」は段落や文章全体の結論を表す文に使われることが多いことからわかるように、すでに出てきた先行文が前提で、「のだ」を伴う文が焦点になるのである。

二つ目は「のだ」に言い換えの用法があることである。その意味で、「因果関係」「課題一解答」「情報の付加」といった規定は言い換えにはなじみにくい。

(13) 中学のときの私の成績は平均を下回っていた。つまり、下から数えたほうが早かったのだ。

話し手は聞き手の理解につねに気を配る。聞き手にイメージが湧きにくそうな場合や、自分の表現意図が伝わっていないと感じた場合、別の表現に言い換えることで、相手の理解がすこしでも上手くいくようにするものである。このような言い換えにおいても、「充分な認識」という用語はしっくりいくように思われる。

三つ目は既存の認識と発話時の認識が逆接の関係になるときである。その際、「換言」「因果関係」「課題一解答」といった用語はふさわしくないように思われる。

(14) 今日は雨なので野球部の練習は中止だと思っていた。しかし、雨の日でも練習があったのだ。

このように仮定の既存の認識が現実によって裏切られ、期待はずれになったような用例においても、見込みのあまかった既存の認識が正され、現実_にに即した正しい認識へと変わ

り、認識が不十分なものから十分なものになる。

2-5 発話時の認識の共有化

④の条件は「発話時の認識を話し手と聞き手に共有させる」というものであるが、話し手または聞き手のどちらかに認識の空隙があり、もう一方の発話によってその空隙が埋められる以上、その空隙が埋まることによって認識の共有化が生まれるのはごく自然なことである。

(10) A 「どうして会議に出席しなかったんですか」

B 「体調が悪かったんです」

において、聞き手Aの認識に「話し手Bが会議に出席しなかった理由がわからない」という空隙があり、その空隙は話し手Bの「体調が悪かったんです」という発話によって埋められる。そして、そこに「会議に出席しなかった理由」の共有化が起こるのである。

話し手が聞き手の知らないことを話すとき、すべて認識の共有化になるので、その場合すべてに「のだ」が必要ではないか、という疑問が出るかもしれないが、ここで問題にしている認識の共有化は、結果として認識が共有化される場合は含まず、聞き手が知らず、話し手だけが知っているということをことさらに意識して伝える場合に限られる。

なお、2-4の「不十分な認識から十分な認識へ」が先の表2の「聞き手の認識」の縦の列に注目したときの「不十分な認識：○ → 十分な認識：○」に対応しているのにたいして、この発話時の認識の共有化は、先の表2の「十分な認識」の横の列に注目したときの「話し手の認識：○ → 聞き手の認識：○」に対応している。

3 「のだ」の諸相

話し手と聞き手の既存の認識および発話時の認識に注目した場合、論理的に考えると、9通りのパターンがあり得る。その一つ一つをここで検証していく。

3-1 話し手と聞き手に前提となる認識がある場合

3-1-1 聞き手の既存の認識に空隙がある場合

(12) A 「この基石はどこで買ったんですか」

B 「北京のデパートで買ったんです」

(12) はすでに見た(10)と同じタイプである。話し手Bと聞き手Aは、話し手が基石を買ったという点では、庵他(2000)の言う前提、本稿で言う不十分な認識を持っている。しかし、ど

ここで買ったかという点では、話し手Bは十分な認識を持っているのにたいし、聞き手Aは不十分な認識しか持っていない。そこで、話し手Bが十分な認識「北京のデパートで」を示すことによって、話し手Bと聞き手Aが十分な認識を共有できるようになる。以上の認識を表にすると、以下のようになる。

既有	話し手	聞き手	発話 →	発話時	話し手	聞き手
不十分	○	○			不十分	○
充分	○	×		充分	○	○

また、「のだ」の否定「のではない」も、これに準じたパターンをとることが多い。

(15) A 「この基石は日本で買ったんですか」

B 「日本で買ったんじゃないありません。北京のデパートで買ったんです」

既有	話し手	聞き手	発話 →	発話時	話し手	聞き手
不十分	○	○			不十分	○
充分	否○	○		充分	否○	否○

同じ(15)の例文において、話し手Bの発話の後半「北京のデパートで買ったんです」に注目すると、聞き手Aの「日本で買った」という思い違いが訂正されるという点で、表は以下のように若干異なる。上の「買ったんじゃないありません」の否定の例も、聞き手の認識が訂正を要するものであるという意味で（上の表の「否○」「○」が下の表の「○」「△」にそれぞれ対応）、このパターンに含まれる。

既有	話し手	聞き手	発話 →	発話時	話し手	聞き手
不十分	○	○			不十分	○
充分	○	△		充分	○	○

3-1-2 話し手の既有の認識に空隙がある場合

(16) A 「実はアメリカに1年ほど留学していたことがあるんだ」

B 「それで、英語がそんなに上手なんだ」

(16)も(12)と同様、話し手と聞き手が前提となる認識、ここでは聞き手Aの英語が上手であること、を持っている。しかし、既有の認識に空隙があるのは話し手であるという意味で、(12)と逆のパターンである。話し手Bの側には聞き手Aが英語が上手であるという認識はあったが、どうしてそんなに上手なのか、その理由がわからなかった。しかし、(16)

の聞き手Aの発話によってその理由が理解できた。つまり、話し手Bの認識の空隙が埋まったわけである。そして、そのことを話し手B自身の発話のなかで「のだ」を使って示したのである。

既有	話し手	聞き手	発話 →	発話時	話し手	聞き手
不十分	○	○			不十分	○
充分	×	○		充分	○	○

また、(15)と同じように、話し手と聞き手の認識が異なる例もある。

(17) A 「この前スポーツに興味ないって言ってたから、明日のサッカー観戦、行かないでしょ」

B 「行くつもりだけど」

A 「えっ、行くんだ」

話し手Aは聞き手Bの「スポーツに興味ない」という発言を聞いていたから、それが前提の認識となつて、Bはサッカー観戦に行かないものだと思ひ込んでいた。しかし、聞き手Bが実際には行くつもりであるということを知つて、話し手の既有的認識が訂正されたのである。

既有	話し手	聞き手	発話 →	発話時	話し手	聞き手
不十分	○	○			不十分	○
充分	△	○		充分	○	○

なお、疑問語疑問文に「のだ」がつく形も、このグループに分類される。ただし、認識の空隙を埋めるところまで行かず、認識の空隙そのものを示すところにとどまる。「認識の空隙を埋め(ようとす)る」と()つきで示したゆえんである。

(10) A 「どうして会議に出席しなかつたんですか」

B 「体調が悪かつたんです」

既有	話し手	聞き手	発話 →	発話時	話し手	聞き手
不十分	○	○			不十分	○
充分	×	○		充分	?	○

3-2 前提となる認識が問題にならない場合

3-2-1 聞き手の既存の認識に空隙がある場合

これまで見てきたのは、話し手と聞き手が前提となる認識を有するものであった。すでに述べたように、前提は「不十分な認識→十分な認識」に由来する。しかし、「不十分-充分」という認識の対立ではなく、「無-有」という認識の対立もある。あるかないかを問う場合、当然前提は問題にならなくなる。

(18) A 「あのさ、実は俺、今度の6月に結婚することになったんだ」

B 「結婚するんだ。おめでとう」

既有	話し手	聞き手	発話 →	発話時	話し手	聞き手
有無	○	×		有無	○	○

この種のタイプは告白という表現上の機能を担うことが多い。聞き手が知らない、話し手だけが知っている何か重大なことを打ち明けるとき、しばしば「のだ」が用いられる。なお、ここでは認識の有無が問題になっているので、訂正を必要とする誤った認識を持つというパターンはない。

(18)の例は、④の条件に加えて、部分的には③の条件も満たしている。というのは、前提が存在しない以上、不十分な認識こそ存在しないが、(18)の「結婚することになったんだ」は、聞き手の認識を十分にしていると言えるからである。しいて言うなら、「認識なし→十分な認識」ということになろうか。しかし、このグループには、④の条件は満たすものの、③の条件を満たさないものがある。それは、以下のような例である。

(19) 「あのさ、私、きのう新宿に行ったんだ。そしたら、芸能人に会っちゃって……」
この(19)は、話し手と聞き手の認識の共有化という④の条件を利用して、聞き手の知らない話題を導入するために使われている「のだ」である。表にすると、(17)と変わらない。しかし、この話題導入の場合、聞き手の認識を十分にしたという含みはなく、③の条件は満たしていない。もっぱら、④の条件、話し手と聞き手の認識の共有化のためだけに働いている^(注6)。この種の「のだ」は「今朝の新聞で見たんだが／けれども、……」のように、接続助詞「が」「けれども」をともなって、1文の中で前置き表現として使われることが多い。

3-2-2 話し手の既存の認識に空隙がある場合

話し手と聞き手が既存の認識を共有しない場合、話し手のほうに認識の空隙がある場合もある。話し手が知らなかったことを聞き手が発話し、話し手はその発話を繰り返して、それに「のだ」をつけることによって、それまでは知らず、今初めて知ったという感じを

出すのである (注6)。

(18) A 「あのさ、実は俺、今度の6月に結婚することになったんだ」

B 「結婚するんだ。おめでとう」

既有	話し手	聞き手	発話 →	発話時	話し手	聞き手
有無	×	○		有無	○	○

3-3 聞き手が問題にならない場合

3-3-1 話し手に既有の認識がある場合

聞き手の存在が問題にならない「のだ」もある。この「のだ」は独り言として使うことができる。

(20) (隣の家の子が初めて制服を着て出てきたのを見て)あの子も中学生になったんだ。

話し手の既有の認識は「隣の家の子が初めて制服を着て出てきた」である。話し手は隣の家の子が制服を着ているという見なれない光景にまず、えっ、と思ったはずである。そして、その子がなぜ制服を着ているのか推論したところ、もう制服を着て学校に通う年齢、つまり中学生になったという結論に行き着いたのである。この推論によって、不十分な認識が十分な認識になった。したがって条件③は満たすが、聞き手の存在が前提になっていない以上、話し手と聞き手が認識を共有することはなく、条件④は満たさない。

既有	話し手	発話 →	発話時	話し手
不十分	○		不十分	○
充分	×		充分	○

6 話し手と聞き手に前提となる認識がある3-1に比べて、話し手または聞き手の一方にしか既有の認識がない3-2は典型的とは言いがたいマイナーな用法である。周囲の友人との共感を大切にすする若い世代は話題の共有化のためだけに使われるこのマイナーな用法を好む傾向にあるが、比較的年配の世代はこうした用法に落ち着かなさを感じるようである。たとえば、(19)の「あのさ、私、きのう新宿に行ったんだ。そしたら、芸能人に会っちゃって……」のような話題導入はもっぱら若い人たちの間でだけ用いられているようであるし、「そうなんだ」という相槌も「3-2-2」の「今初めて知った」の意味で若い世代は頻用する。しかし後者に関して、比較的年配の世代は、「のだ」は共有化された既有の認識と結びついた新しい認識を表すと限定的に考えるため、「今初めて知った」のつもりで発せられた「そうなんだ」という相槌を、既有の認識がないのにあたかも共有化された既有の認識があるかのごとく発せられた、いわば「知ったか振り」の相槌として受け取ってしまう傾向があるようである。つまり、3-2-2の「そうなんだ」を3-1-2の「そうなんだ」と解釈してしまうわけである。本稿の分類はこのあたりの事情をとらえる際にも有効であると考えられる。

話し手自身がおこなった推論が間違っていて、それを訂正する場合もある。

(14)今日は雨なので野球部の練習は中止だと思っていた。しかし、雨の日でも練習があったのだ。

話し手は今日は雨だという前提から推論し、練習はないという結論に達していた。しかし、その推論が誤りであって、実際には練習があった。そのことを「のだ」を使って表したのである。

既有	話し手	発話 →	発話時	話し手
不十分	○		不十分	○
充分	△		充分	○

3-3-2 話し手に既有的認識がない場合

不十分な認識が十分な認識にもならず、話し手と聞き手の認識の共有もない、つまり条件③も④も満たさないという「のだ」も論理的にはあり得る。たとえば(21)のようなものである。

(21) (部屋のカーテンを開けて外を見て) 雪が降ったんだ。

カーテンのそばに行ったときにひんやりとした空気を感じて、どうしたんだろう、と思ってカーテンを開けたり、いつもの朝とは違って外が静かなので、その原因を確かめるためにカーテンを開けたりしたのであれば、前提となる認識があったということで「3-3-1」に分類されるだろうが、何の先入観もなく、何の気なしにカーテンを開けて初めて雪が積もっていることに気づいたとき、(21)のような発話をすることもあり得るだろう。これは「3-2-2」で見た「今初めて知った」というタイプの、聞き手がいないものであると考えればわかりやすい。

既有	話し手	発話 →	発話時	話し手
有無	×		有無	○

4 おわりに

4-1 結論

すでに述べたとおり、本稿では、以下の4条件を満たすとき(ただし、③、④はいずれか一方しか満たさないこともあり得る)、話し手は「のだ」を選択すると考える。

- ① 話し手および聞き手の発話時の認識だけでなく、それに関連する既有的認識も問題にする。
- ② 話し手または聞き手の既有的認識の空隙を埋め(ようとす)る。
- ③ 話し手または聞き手の既有的認識を、発話時に不十分なものから充分なものにする。
- ④ 発話時の認識を話し手と聞き手に共有させる。

また、話し手と聞き手の既有的認識および発話時の認識に注目して分類すると、9通りの場合に分かれる。

- ① 話し手と聞き手に前提となる認識があり、聞き手の充分な認識に空隙がある場合

既有的	話し手	聞き手
不充分	○	○
充分	○	×

→

発話時	話し手	聞き手
不充分	○	○
充分	○	○

- ② 話し手と聞き手に前提となる認識があり、聞き手の充分な認識が訂正を要するものである場合

既有的	話し手	聞き手
不充分	○	○
充分	○	△

→

発話時	話し手	聞き手
不充分	○	○
充分	○	○

- ③ 話し手と聞き手に前提となる認識があり、話し手の充分な認識に空隙がある場合

既有的	話し手	聞き手
不充分	○	○
充分	×	○

→

発話時	話し手	聞き手
不充分	○	○
充分	○	○

- ④ 話し手と聞き手に前提となる認識があり、話し手の充分な認識が訂正を要するものである場合

既有的	話し手	聞き手
不充分	○	○
充分	△	○

→

発話時	話し手	聞き手
不充分	○	○
充分	○	○

- ⑤ 前提となる認識が問題にならず、聞き手の既有的認識に空隙がある場合

既有的	話し手	聞き手
有無	○	×

→

発話時	話し手	聞き手
有無	○	○

⑥ 前提となる認識が問題にならず、話し手の既有の認識に空隙がある場合

既有	話し手	聞き手	発話	発話時	話し手	聞き手
有無	×	○	→	有無	○	○

⑦ 聞き手が問題にならず、話し手の十分な認識に空隙がある場合

既有	話し手	発話	発話時	話し手
不十分	○	→	不十分	○
充分	×		充分	○

聞き手が問題にならず、話し手の十分な認識が訂正を要するものである場合

既有	話し手	発話	発話時	話し手
不十分	○	→	不十分	○
充分	△		充分	○

⑧ 聞き手も前提となる認識も問題にならず、話し手の既有の認識に空隙がある場合

既有	話し手	発話	発話時	話し手
有無	×	→	有無	○

4-2 今後の課題

まず、「不十分な認識」「十分な認識」という用語の一長一短の一短の部分、つまり用語の曖昧さの問題がある。その用語によって規定される、既存の認識と発話時の認識との関係にどのようなタイプがあるのかを整理することによって、「不十分な認識」「十分な認識」という用語の範囲を厳密に確定していくことが必要である。

それから、「のだ」を使うことによって生まれる種々の表現機能（発見、主張、決意、回想、納得、命令など）について本稿では触れることができなかった。上記の表によって表される9通りのパターンと、これらの種々の表現機能との関連についても調べる必要がある。いずれも今後の課題としたい。

参考文献

- ・庵功雄(1999)『ことばのしくみを考える』一橋大学留学生センター
- ・庵功雄(2000)「教育文法に関する覚え書きー「スコープの「のだ」を例としてー」『一橋大学留学生センター紀要』3一橋大学留学生センター

- ・ 庵功雄、高梨信乃、中西久美子、山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- ・ 奥田靖雄(1991)「説明(その1)ーのだ、のである、のですー」『ことばの科学4』むぎ書房
- ・ 菊地康人(2000)「「のだ(んです)の本質」『東京大学留学生センター紀要』10 東京大学留学生センター
- ・ 久野暉(1973)『日本文法研究』大修館書店
- ・ 小金丸(現 野田)春美(1990)「ムードの「のだ」とスコープの「のだ」」『日本語学』9-3 明治書院
- ・ 田野村忠温(1990)『現代日本語の文法Ⅰ「のだ」の意味と用法』和泉書院
- ・ 寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
- ・ 野田春美(1997)『「の(だ)」の機能』くろしお出版
- ・ 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
- ・ 松岡弘(1987)「「のだ」の文・「わけだ」の文に関する一考察」『言語文化』24-一橋大学語学研究室
- ・ 山口佳也(1975)「「のだ」の文について」『国文学研究』56 早稲田大学国文学会